

目的 食生活が文化・社会・経済的な要因の影響を受けて、急速に変化しているといわれている。「日常」の食生活実態に関する報告はみられるが、伝統や慣習といった食文化の継承されやすい「特別な日」に関する報告は少ない。このため、正月の食生活の特徴とその変化を時系列的にとらえることを目的に1986年より調査を行ってきた。前報¹⁾では、3観測年(1986, 1989, 1992年)の喫食料理件数を2元配置分散分析により解析し、3観測年間に有意差がなく、3日間の日間変動には有意差が認められた。今回は10年間の正月の主食について、喫食料理内容・件数の変化および時刻に対する喫食頻度を検討した。

方法 1986~1995年における正月三が日に喫食した料理(飲み物も含む)と共に、その時刻・場所・料理の作り手を調査した。調査対象は首都圏の短大に通う女子学生、方法は自己記入式留め置き法によった。調査内容はすべてコード化し、年・日・時刻を単位に料理内容別に単純集計した。また、ベイズ的平滑化法を用いて変化の様子を検討した。

結果 有効回答者は1435人(回収率97.7%)、観測10年間・3日間の総料理件数は49,811件、そのうち主食は21.7%を占めた。元日の喫食件数は2・3日目よりやや少なかった。雑煮は3日目に向け減少し、すしや雑煮以外のもち料理は元日・3日目より2日目に多く、白飯やパンは3日目に向け増加することがわかった。また、雑煮は汁物との代替性が高く、主食と副食の汁を兼用していることがわかった。主食の喫食時刻については、年・日効果が認められ、10年間および3日間ともに変動のあることが明らかとなった。

1) 日本家政学会誌, 47, 49-58 (1996)